

の辺に斬る。

これは大分君稚臣の武勇を記したもののだが、この軍には恵足も従軍していた。天武天皇四年(六四五)六月、大分君恵足が病没した。天皇は壬申の乱にさいして彼の勲功を思召され、詔をたまわってこれを賞し、外小紫位(後の外従三位)を賜った。また大分君稚臣は兵衛(天皇親衛軍)として側近に仕えていたが、同八年(六五九)三月死去した。天皇は彼の生前の功を嘉せられて、外小錦上位(後の外止五位下)を賜った。

こうした記録から見ると、大分國造の大分君恵足とその族である稚臣は、共に朝廷に召されて衛士(内舍人)となっていたものであろう。中央で活躍している大分國造(大分君)おそらくこの時点(六七〇年代)で、豊後國が設置され、國司の任命があったのではなからうか。(大分市津守の大分明神社は大分君稚臣を祀っている)

郷土史料集成の最初の豊後國司は陽侯史真躬であるが、県政史にもあるように、最初の豊後守は万葉集卷五に和歌一首を留めている大伴三依(大伴の大夫)である。次が陽侯史真身で、続日本紀・天平十年の条にある。次夏四月、庚申(廿二日)外従五位下陽侯史真身と豊後守と為す。

(続日本紀)

この陽侯史は帰化氏族で、伝承によると、随煬帝の裔で達率揚公阿了王の後といわれ、白村江の敗戦によって百済の遺民と共に渡来したという。陽侯史真身は豊後守として、果して國府に赴任したかどうか、四か月後の同年八月、次の國司小治田兼良(兼良)が豊後守に任じられてい

るのを見ると、疑ってみたい。なお郷土史料集成には、陽侯史真躬(身)の次に多治比真人(比真人)を置き、天平十九年六月の任命にしているが、

これに備後守の誤り、続日本紀には天平十年八月に小治田朝臣諸人が任じられ、次が約十九年を隔てて天平宝字元年に、櫻井朝臣(朝臣)子祖父が任ぜられている。(つづく)

紹介

蒲江八景について

會員 羽 柴 弘

先ごろ大分合同新聞の夕刊「灯籠」に「蒲江八景」について書いて、あと紹介する紙幅のないことを述べたところ、だんだん問合せがあった。幸いここは二千字ばかりの余白が出来ているので、簡単に紹介しよう。実は八景選定のことには「近江八景」に倣うものがあるが、蒲江の場合は、秋月橋門、その子新太郎、高妻、楠といふた学者先生による選定である。ご本家中国の「瀟湘八景」に直接していると考えるのが至当であろう。またその八景三種を並べて書いて見よう。

8	江天暮雪	比良の暮雪	轟山暮雪(斐山)
7	遠浦帯帆	矢橋の帯帆	粒嶼帯帆(粒島)
6	瀟湘夜雨	唐崎の夜雨	鷹山夜雨(高山)
5	煙寺晚鐘	三井の晚鐘	東光晚鐘(東光寺)
4	漁村夕照	瀬田の夕照	鏗州夕照(鏗島)
3	平沙落雁	堅田の落雁	館島落雁(履形島)
2	洞庭秋月	石山の秋月	青龍秋月(青龍山)
1	山市晴嵐	栗津の晴嵐	峰台晴嵐(背牛山)
	蒲湘八景	近江八景	蒲江八景

さて、ではその蒲江八景であるが、

○峰台晴嵐

四原 休

嵐気籠孤岫 蒼々翠欲流 峰台日背平山の一角、燈台が

峰台看秋色 万里浮水天

田原俊日佐伯藩士

○峰台晴嵐

嵐気孤岫に籠り 蒼々たる翠流れん

と歎す。峰台に看る秋色は万里水天に流る

雲霧日はらひつくして背平山

松にあらしの音のみぞする

このように五言絶句一首と和歌一首と組合せになつて
いる。第二景以下は漢詩のみ、訓点をつけてあげよう。

○青龍秋月

楠 釣(文辭)

松影落幽溪 月光照深洞 欲探領下珠 恐駭驪龍費

月影は波路をこへて青龍の 山の紅葉に照りまさけり

○館島落雁

古川 魚

秋潮何渺々 蘆蕪月蒼々 半夜雁声集 長天月似霜

秋毎に落ち来る雁は屋形島 名を頼みてぞ宿るなるらん
(喬佐古春鞆)

○鰯洲夕照

松岡 蒙

海潮天低水 風鳴山欲搖 斜陽忽須滅 巨鯨浪間跳

沖津波千重おりかくる深島や
岩根の木々に夕日照りそふ

この鰯洲は深島、鰯はあじが、つまりふかのこと。
ふかが多いのでふか島と呼ぶようになったという。

○東光晚鐘

劉 新

秋月新太郎のこと

飢鴉集枯木 寒日下危峰 暮色蒼然至 一声山寺鐘

入相の鐘のひびきは何となく

物哀れにも聞へけるかな

○鷹山夜雨

高妻 友 高妻芳洲

繞山声不断 瑟瑟入松 却怪天壇上 神仙夜鼓琴

あつたまなる都の人をおもひ出で

聴く高山の夜半の村雨

○秋嶼帰帆

中嶋順之

波濤濤不驚 秋冷半江水 定知獲魚多 帰帆疾於矢

夕な馬やちある船な帆をあげて

粒島かへる海士の釣舟

○轟山暮雪

劉 龍 秋月齋門

黔澤凍雲深 寒鴉欲結舌 天晴不見山 唯見万尋雪

寒山越へ行く人のおまかげは

定かに見ゆる雪の夕暮

以上で「蒲江八景」の詩と和歌は終ったが、和歌の作
者の名前を省いたのは本意でないが、作者は春鞆の外は
わからないためである。

漢詩は、お互いに苦手である。しかしこの八篇の詩は
なかなかすぐれているようで、ついでに組みたくなる。

漢詩をとおして八景を理解する、また楽しい。だからつ
い、概にもないことに取組むわけである。